

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づき習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ		
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェンヒドラミン	塩酸塩なしジフェンヒドラミンはあり →レスタミンコーワ軟膏	アレルギーを塗布または皮内注射したときに起こる発赤、腫疹、そう痒などのアレルギー性皮膚反応は、本剤の1回塗布により著明に抑制される。					頻度不明(過敏症)						・眼のまわりに使用しない。		通常、症状により適量を1日数回、患部に塗布または塗擦する。	蕁麻疹、湿疹、小児ストロフルス、皮膚そう痒症、虫さされ
	ジフェンヒドラミン	レスタミンコーワ軟膏	アレルギーを塗布または皮内注射したときに起こる発赤、腫疹、そう痒などのアレルギー性皮膚反応は、本剤の1回塗布により著明に抑制される。					頻度不明(過敏症)						・眼のまわりに使用しない。		通常、症状により適量を1日数回、患部に塗布または塗擦する。	蕁麻疹、湿疹、小児ストロフルス、皮膚そう痒症、虫さされ
	マレイン酸クロルフェニラミン	外用の添付文書なし															
鎮痒成分	クロタミトン	オイラックス	本剤は抗ヒスタミン作用を示さないこと、またヒトの皮膚感覚のうちそう痒感を抑制するが、他の皮膚感覚には影響を与えないことから、抗ヒスタミン剤、局所麻酔剤とは作用機序を異にすると考えられる。一般には、皮膚に軽いしゃく熱感を与え、過覚に対するこの刺激が親合的にそう痒感を消失させるといわれている。					0.1~5%未満(熱感・しゃく熱感、刺激症状(ピリピリ感、ひりひり感等)、発赤、発赤増強・紅斑増悪、分泌物増加、浸潤傾向)	5%以上(過敏症)	本剤に対して過敏症の既往歴	・高齢者・妊婦又は妊娠の可能性のある婦人への大量又は長期にわたる広範囲の使用、乳幼児・小児に対する広範囲の使用			・眼あるいは眼周囲及び粘膜には使用しない。 ・塗布直後、軽い熱感を生じることがあるが、通常短時間のうちに消失する。	・高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人には、大量・長期にわたる広範囲の作用は避ける	通常、症状により適量を1日数回患部に塗布又は塗擦する。 ・高齢者・妊婦又は妊娠の可能性のある婦人・大量かつ広範囲の使用は避ける。	湿疹、蕁麻疹、神経皮膚炎、皮膚そう痒症、小児ストロフルス

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化
評価の視点		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの				使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ	
殺菌成分	フェノールで代用	本剤は、使用濃度においてグラム陽性菌、グラム陰性菌、結核菌には有効であるが、芽胞(炭疽菌、破傷風菌等)及び大部分のウイルスに対する効果は期待できない。					頻度不明(過敏症)		・横痃皮膚及び結膜(吸収され中毒症状発現)			・原液または濃厚液が皮膚に付着した場合には腐蝕及び吸収され、中毒症状を起すことがある。 ・眼に入らないように注意すること。 ・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用する。・炎症または易刺激性の部位に使用する場合には、濃度に注意して正常の部位に使用するよりも低濃度とすることが望ましい。 ・外用にのみ使用すること。 ・密封包装、ギブス包装、パックに使用すると刺激症状及び吸収され、中毒症状があらわれるおそれがあるので、使用しないこと。 ・長期間または広範囲に使用しないこと。[吸収され、中毒症状を起すおそれがある。]・誤飲を避けるため、保管及び取扱いは十分注意すること。	長期間に使用しないこと。(吸収され、中毒症状の発現のおそれ。)	効能・効果 用法・用量(本品希釈倍数) ・手指・皮膚の消毒:フェノールとして1.5~2%溶液を用いる。(50~67倍) ・医療用具、手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:フェノールとして2~5%溶液を用いる。(20~50倍) 排泄物の消毒:フェノールとして3~5%溶液を用いる。(20~33倍) 下記疾患の鎮痒療疹(小児ストロフルスを含む)、じん麻疹、虫さされ液: フェノールとして1~2%溶液を用いる。(50~100倍) 軟膏:フェノールとして2~5%軟膏を用いる。(20~50倍)

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I 用法用量		
			重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ						適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	使用量に上 限があるもの
評価の視点	薬理作用	相互作用	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理に基づき 習慣性	適応禁忌	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	機能効果
殺菌成分	塩化ベンザ ルコニウム 0.1w/v%チア ミトール水	・本剤は使用 濃度におい て、栄養型細 菌(グラム陽 性菌、グラム 陰性菌)、真 菌等には有 効であるが、 結核菌及び 大部分のウ ィルスに対 する殺菌効果 は期待でき ない。イオン 界面活性剤 であるので、 表面張力を 低下させ、 洗浄作用、 乳化作用等 を示す。 ・作用機序 は、陰電荷 を帯びる細 菌に陽電荷 を帯びる塩 化ベンザル コニウムが 菌体表面に 吸着・集積 され、菌体 たん白を変 性させ殺菌 作用をあら わす。	併用禁忌(他 剤との併用 により重大 な問題が 発生する おそれ)	併用注意	頻度不明(過 敏症)	粘膜炎、創傷面 または炎症部 位に長期 間または 広範囲に 使用しない こと	・原液は皮膚・粘 膜に付着及び 眼に入らな いように注 意する(刺激 性がある)。 ・炎症または 易刺激性の 部位(粘膜、 陰股部等) への使用:正 常の部位へ の使用より 低濃度とし ることが望 ましい。また、 使用後は滅 菌精製水で 水洗する。 ・深い創傷ま たは眼に使 用する希釈 水溶液は、 調製後滅菌 処理するこ と。 ・経口投与し ないこと。洗 腸には使用 しないこと。 ・密封包装、 ギプス包装、 パックに使 用すると刺 激症状があ らわれるこ とがあるの で、使用し ないことが 望ましい。	・粘膜炎、創傷 面または炎 症部位に長 期間または 広範囲に使 用しないこ と(全身吸収 による筋力 低下がある) 。	効能・効果:用法・用量(塩化ベンザルコ ニウム濃度) ①手指・皮膚の消毒:通常石けんで十分に 洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落と した後、塩化ベンザルコニウム0.05~0.1% 溶液に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布 片で清拭する。術前の手洗の場合には、5 ~10分間ブラッシングする。 ②手術部位(手術野)の皮膚の消毒:手術 前局所皮膚面を塩化ベンザルコニウム 0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベン ザルコニウム0.2%溶液を塗布する。 ③手術部位(手術野)の粘膜の消毒、皮 膚・粘膜の創傷部位の消毒:塩化ベンザル コニウム0.01~0.025%溶液を用いる。 ④感染皮膚面の消毒:塩化ベンザルコ ニウム0.01%溶液を用いる。 ⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウ ム0.1%溶液に10分間浸漬するか、または 厳密に消毒する際は、器具を予め2%炭酸 ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベン ザルコニウム0.1%溶液中で15分間煮沸す る。 ⑥手術室・病室・家具・器具・物品などの消 毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶 液を布片で塗布・清拭するか、または噴霧 する。 ⑦腫洗浄 塩化ベンザルコニウム0.02~ 0.05%溶液を用いる。 ⑧結膜囊の洗浄・消毒 塩化ベンザルコ ニウム0.01~0.05%溶液を用いる。 ・炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股 部等)への使用:正常の部位への使用より			
かゆみ・虫さされ用薬												
抗ヒスタミン成分	塩酸イソペ ンジル	アンダント ールゼリー ゼリー軟 膏	抗ヒスタミン 作用及び抗 アレルギー作 用を有する。 毛細血管浸 透抑制作用 を有する。		0.1%~5%未 満(しみ、びり びり感・ひり ひり感・疼痛 等の刺激感) 0.1%未満 (熱感、灼熱 感)	0.1%~5%未 満(過敏症)	炎症症状が 強い浸出性 の皮膚炎の 場合には、適 切な外用剤 の使用により その炎症が 軽減後もか ゆみが残る 場合に使用				通常、症状により適量を 日数回患部に塗布する。	皮膚そう痒症、 じんま疹、唇 舌腫、小児ス トロフルス、 虫さされ、痒 疹、神経皮膚 炎、湿疹、多 形性皮膚炎、 紅斑、凍瘡、 薬疹、日焼け に伴うそう痒
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェ ンヒドラミン	塩酸塩なし ジフェンヒ ドラミンは あり ーレスタミ ンコーワ軟 膏	アレルギーを 塗布または皮 肉注射したと きに起こる発 赤、膨疹、そ う痒などのア レルギー性皮 膚反応は、本 剤の1回塗布 により著明に 抑制される。		頻度不明(過 敏症)		炎症症状が 強い浸出性 の皮膚炎:適 切な外用剤 の使用でそ の炎症が軽 減後もかゆ みが残る場 合に使用する。		使用部位:眼の まわりに使用 しない。		通常、症状により適量を 日数回、患部に塗布ま たは塗擦する。	痒疹、湿疹、 小児ストロフ ルス、皮膚そ う痒症、虫さ され

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往症、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化								
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果				
		併用禁忌(他 剤との併用に より重大な問 題が発生する おそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの			使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ					
	ジフェンヒドラ ミン	レスタミン コーワ軟膏	アレルゲン を塗布または皮 内注射したと きに起こる発 赤、膨疹、そ う痒などのア レルギー性皮 膚反応は、本 剤の1回塗布 により著明に 抑制される。				頻度不明(過 敏症)				炎症症状が 強い浸出性 の皮膚炎:適 切な外用剤 の使用でそ の炎症が軽 減後もかゆ みが残る場 合に使用する。		使用部位:眼 のまわりに使 用しない。		通常、症状により適量を1 日数回、患部に塗布また は塗擦する。	蕁麻疹、湿疹、 小児ストロフル ス、皮膚そう痒 症、虫さされ	
	抗ヒスタミン 酸クロルフェ ニラミン	外用の添付 文書なし															
鎮 痒 成 分	クロタミン	オイラックス	本剤は抗ヒス タミン作用を 示さないこと、 またヒトの皮 膚感覚のうち そう痒感を抑 制するが、他 の皮膚感覚 には影響を与 えないことな どから、抗ヒ スタミン剤、 局所麻酔剤と は作用機序 を異にすると 考えられる。 一般には、皮 膚に軽いか く熱感を与 え、温覚に対 するこの刺激 が競合的に そう痒感を消 失させている。				0.1~5%未満 (熱感・しゃく 熱感、刺激症 状(ピリピリ 感、ひりひり 感等)、発 赤、発赤増 強・紅斑増 悪、分泌物増 加、浸潤傾 向)	5%以上(過敏 症)		本剤に対して過敏 症の既往歴	高齢者・妊婦又は 妊娠の可能性の ある婦人への大 量又は長期にわたる 広範囲の使用、乳 幼児・小児に 対する広範囲の 使用		強い炎症状 が強い浸出性 の皮膚炎:適 切な外用剤 の使用でそ の炎症が軽 減後もかゆ みが残る場 合に使用する。	眼あるいは眼 周囲及び粘膜に は使用しない。 ・塗布直後、軽 い熱感を生じ ることがある が、通常短時 間のうちに消 失する。	高齢者、妊婦 又は妊娠して いる可能性 のある婦人 には、大量・ 長期にわた る広範囲の 作用は避け る	通常、症状により適量を1 日数回患部に塗布又は塗 擦する。 ・高齢者・妊婦又は妊婦の 可能性のある婦人:大量 かつ広範囲の使用は避け る。	湿疹、蕁麻疹、 神経皮膚炎、 皮膚そう痒症、 小児ストロフル ス
局 所 刺 激 成 分	アミノ安息香 酸エチル	アミノ安息香 酸エチル「丸 石」(内用・ 外用)	胃粘膜の知 覚神経末梢 を麻痺させ、 中枢への刺 激伝達を遮 断して疼痛、 嘔吐を鎮め る。				0.1~5%(食 欲不振、悪 心、口渇、便 秘)、0.1%未 満(下痢、メ トヘモグロビ ン血症(小 児))	頻度不明(過 敏症)		本剤過敏症既往 歴 乳幼児(内用・坐 剤の場合)	高齢者、妊婦又は 妊娠の可能性		(内用) 口内にしびれ等 を覚さないた め速やかに飲 み下す (外用) 眼には使用し ないこと[軟膏・ 液剤の場合]、 鼻で吸い込ま ないこと[散 布剤の場合]	長期連続投 与回避	(内用) 1日0.6~1g、 3回分服。適 宜増減。高齢者 は減量 (外用) 通常、5~15% の軟膏剤、液 剤、散布剤と して、または、 1個中200mg ~300mgを含有 する坐剤とし て適宜患部に 使用する	(内用) 下痢疾患に伴 う疼痛、嘔吐、 胃炎、胃潰瘍 (外用) 下痢疾患にお ける鎮痛・鎮 痒:外傷、熱 傷、日焼け、 皮膚潰瘍、搔 痒症、痔疾	

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化						
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ			薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ			適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化
局 所 麻 酔 成 分	塩酸ジブカイン 注、表面麻 酔類似と考 え使用	感覚・求心神経 繊維のNa+ チャネルを遮 断することにより局所麻酔 作用を発現する。効力、持 続性、毒性い ずれも最大級の 局所麻酔薬 であるが、より効力を強 めるために局 所鎮痛以外の 目的にはエ ピネフリンを 添加して用 いる			痲痺、痲痺等 の中毒症状 (頻度不明)	ショック(頻度 不明)	頻度不明(眼 気、不安、興奮、霧視、眩 暈、悪心・嘔 吐等)	頻度不明(過 敏症)		本剤に対し過敏症 の既往歴	本人又は両親、兄 弟に気管支喘息、 発疹、蕁麻疹等の アレルギー反応を 起こしやすい体質、 高齢者、妊婦又は 妊娠している可能 性のある婦人。							使用に際し、目的濃度の 水性注射液または水性液 として使用する。 ただし、年齢、麻酔領域、 部位、組織、症状、体質に より適宜増減する。 仙骨麻酔：0.05～0.1%注 射液にエピネフリンを添加 したものをを用い、通常成人 10～30mgを使用する。 伝達麻酔(基準最高用量： 1回40mg)：0.05～0.1%注 射液にエピネフリンを添加 したものをを用い、通常成人 3～40mgを使用する。 浸潤麻酔(基準最高用量： 1回40mg)：0.05～0.1%注 射液にエピネフリンを添加 したものをを用い、通常成人 1～40mgを使用する。 表面麻酔・耳鼻咽喉科領 域の粘膜麻酔には、1～ 2%液にエピネフリンを添 加したものをを用い、噴霧ま たは塗布する。眼科領域 の麻酔には、0.05～0.1% 液にエピネフリンを添加し たものをを用い、通常成人に は1～5滴を点眼する。・ 尿道粘膜麻酔には、0.1% 液にエピネフリンを添加し たものをを用い、通常成人 男子10～20mg、女子3～ 7mgを使用する。膀胱粘 膜麻酔には、0.025～ 0.05%液にエピネフリンを 添加したものをを用い、通常 成人10～20mgを使用す る。・局所鎮痛には、0.025 ～0.05%液を用い、適量を 使用する。 歯科領域麻酔：0.1%注射 液にエピネフリンを添加し たものをを用い、伝達麻酔・ 浸潤麻酔には通常成人1 ～2mgを使用する。	仙骨麻酔、伝 達麻酔、浸潤 麻酔、表面麻 酔、歯科領域 における伝達 麻酔・浸潤麻 酔

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化						
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの			使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
局所麻酔成分	リドカイン キシロカイン液「4%」:塩酸リドカイン表面麻酔に類似のため使用	神経膜のナトリウムチャネルをブロックし、神経における活動電位の伝導を可逆的に抑制し、知覚神経及び運動神経を遮断する局所麻酔薬である。表面・浸潤・伝達麻酔効果は、塩酸プロカインよりも強く、作用持続時間は塩酸プロカインよりも長い。		意識障害、痙攣、痙攣(頻度不明)	ショック(頻度不明)	頻度不明(眼痛、不安、興奮、霧視、眩暈、悪心・嘔吐)	頻度不明(過敏症)		本剤の成分又はアミド型局所麻酔薬に対し過敏症の既往歴。		高齢者又は全身状態が不良。心刺激伝導障害。重症の肝機能障害又は腎機能障害。幼児。妊婦又は妊娠している可能性のある婦人。	過量投与で中毒症状が現れる。症状として中枢神経系(不安、興奮、意識消失、全身痙攣など)、心血管系(血圧低下、徐脈、循環虚脱など)が現れる。 ・眼科(点眼)用として使用しないこと。注射用として使用しない。		塩酸リドカインとして、通常成人では80~200mg(2~5mL)を使用する。なお、年齢、麻酔領域、部位、組織、体質により適宜増減する。  幼児(特に3歳以下)では低用量から投与を開始。	表面麻酔
抗炎症成分	グリチルレチン酸	テルマクリン軟膏	グリチルレチン酸は急性炎症に対する抗炎症作用(浮腫抑制-ラット、肉芽腫抑制-ラット、抗紅斑-モルモット)を有する。抗炎症作用は主成分であるグリチルレチン酸の化学構造がハイドロコチゾンの化学構造に類似しているところによると推定される。				5%以上又は頻度不明(過敏症)				眼科用として使用しない		通常、症状により適量を1日数回患部に塗布または塗擦する。	湿疹、皮膚そう痒症、神経皮膚炎	
抗炎症成分	サリチル酸メチル	サリチル酸メチル「ミヤザワ」				大量使用:頭痛、悪心・嘔吐、食欲不振、頻脈	過敏症		本剤に対し過敏症の既往歴		眼には使用しない		大量使用による頭痛、悪心・嘔吐、食欲不振、頻脈	5%又はそれ以上の濃度の液剤、軟膏剤又はリニメント剤として皮膚局所に塗布する	下記における鎮痛・消炎・関節痛、筋肉痛、打撲、捻挫

## 鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬（パップ剤を含む）

製品群No. 57

ワークシートNo. 37

リスクの程度の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ			D 濫用のおそれ	E 患者背景（既往歴、治療状況等）（重篤な副作用につながるおそれ）	F 効能・効果（症状の悪化につながるおそれ）	G 使用方法（誤使用のおそれ）	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	I 用法用量	J 効果効果			
		薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与（投与により障害の再発・悪化のおそれ）	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する（適応を誤るおそれ）				使用方法（誤使用のおそれ）		
評価の視点		併用禁忌（他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ）	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの				使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
殺菌成分	イソプロピルメチルフェノール	フェノールを使用	本剤は、使用濃度においてグラム陽性菌、グラム陰性菌、結核菌には有効であるが、芽胞（炭疽菌、破傷風菌等）及び大部分のウイルスに対する効果は期待できない。				頻度不明（過敏症）		・潰瘍皮膚及び粘膜炎（吸収され中毒症状発現）			<ul style="list-style-type: none"> <li>・原液または濃厚液が皮膚に付着した場合には、腐蝕及び吸収され、中毒症状を起すことがある。</li> <li>・眼に入らないように注意すること。</li> <li>・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。</li> <li>・炎症または易刺激性の部位に使用する場合には、濃度に注意して正常の部位に使用するよりも低濃度とすることが望ましい。</li> <li>・外用にのみ使用すること。</li> <li>・密封包装、ギプス包装、パックに使用すると刺激症状及び吸収され、中毒症状があらわれるおそれがあるので、使用しないこと。</li> <li>・長期間または広範囲に使用しないこと。〔吸収され、中毒症状を起すおそれがある。〕</li> <li>・誤飲を避けるため、保管及び取扱いには十分注意すること。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長期間に使用しないこと。（吸収され、中毒症状の発現のおそれ。）</li> </ul>	効能・効果 用法・用量（本品希釈倍数） ・手指・皮膚の消毒：フェノールとして1.5～2%溶液を用いる。（50～67倍） ・医療用具、手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒：フェノールとして2～5%溶液を用いる。（20～50倍） 排泄物の消毒：フェノールとして3～5%溶液を用いる。（20～33倍） 下記疾患の鎮痒 痒疹（小児ストロフルスを含む）、じん麻疹、虫さされ液： フェノールとして1～2%溶液を用いる。（50～100倍） 軟膏：フェノールとして2～5%軟膏を用いる。（20～50倍）		

鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬（パップ剤を含む）

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景（既往歴、治療状況等） （重篤な副作用につながるおそれ）		F 効能・効果（症状の悪化につながるおそれ）		G 使用方法（誤使用のおそれ）			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく留意性	適応禁忌	慎重投与 （投与により障害の再発・悪化のおそれ）	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の 症状の判別に注意を要する（適応を誤るおそれ）	使用方法（誤使用のおそれ）			スイッチ化等に伴う使用環境の変化				
			併用禁忌（他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ）	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ					
殺菌成分	塩酸クロルヘキシジン	グルコン酸塩として5%ピピテン液	抗菌作用（in vitro試験） ・広範囲の微生物に作用し、グラム陽性菌には低濃度でも迅速な殺菌作用を示す。 ・グラム陰性菌には比較的低濃度で殺菌作用を示すが、グラム陽性菌に比べ抗菌力に幅がみられる。 ・芽胞形成菌の芽胞には効力を示さない。 ・結核菌に対して水溶液では静菌作用を示し、アルコール溶液では迅速な殺菌作用を示す。 ・真菌類の多くに抗菌力を示すが、一般的に細菌類よりも抗菌力は弱い。 ・ウイルスに対する効力は確定していない。 作用機序は十分に解明されていないが、比較的低濃度では細菌の細胞膜に障害を与え、細胞質成分の不可逆的漏出や酵素阻害を起こし、比較的高濃度では細胞内の蛋白質や核酸の沈着を起こすことが報告されている。			ショック(0.1%未満)		0.1%未満(過敏症)		・クロルヘキシジン製剤過敏症の既往歴 ・脳、脊髄、耳（内耳、中耳、外耳）（聴神経及び中枢神経に対して直接使用した場合は、難聴、神経障害を来すことがある。） ・膣、膀胱、口腔等の粘膜面（ショック症状の発現が報告されている。） ・産婦人科用（膣・外陰部の消毒等）、泌尿器科用（膀胱・外性器の消毒等）には使用しない。 ・眼	・薬物過敏症の既往歴 ・喘息等のアレルギー疾患の既往歴、家族歴				・本剤は必ず希釈し、濃度に注意して使用すること。 ・外用にのみ使用する。 ・眼に入らないように注意する。				本品は下記の濃度（グルコン酸クロルヘキシジンとして）に希釈し、水溶液又はエタノール溶液として使用する。 効能・効果 用法・用量 （使用例） ①手指・皮膚の消毒 0.1～0.5%水溶液（本剤の50倍～10倍希釈） （通常時：0.1%水溶液（30秒以上） 汚染時：0.5%水溶液（30秒以上）） ②手術部位（手術野）の皮膚の消毒 0.1～0.5%水溶液（本剤の50倍～10倍希釈）又は0.5%エタノール溶液（本剤の10倍希釈） （0.5%エタノール溶液） ③皮膚の創傷部位の消毒 0.05%水溶液（本剤の100倍希釈） （0.05%水溶液） ④医療用具の消毒 0.1～0.5%水溶液（本剤の50倍～10倍希釈）又は0.5%エタノール溶液（本剤の10倍希釈） （通常時：0.1%水溶液（10～30分） 汚染時：0.5%エタノール溶液（30分以上）） 緊急時：0.5%エタノール溶液（2分以上） ⑤手術室・病室・家具・器具・物品等の消毒 0.05%水溶液（本剤の100倍希釈） （0.05%水溶液）		



鎮痛・鎮痒・収れん・消炎薬(パップ剤を含む)

製品群No. 57

ワークシートNo.37

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	機能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ			長期使用による健康被害のおそれ
局所刺激成分	アンモニア	アンモニア水「エビス」						頻度不明(局所刺激、発赤、灼熱感)	頻度不明(過敏症)					眼又は眼の周囲に使用しない		希釈して使用眼に入らないようにする 原液または濃厚液の蒸気を吸入すると、呼吸器等の粘膜を刺激し、喉頭収れん、肺・気管支に障害を起こすことがある	刺激作用を有するので、長期間または同一部位に反復使用しない 湿布等によるたる皮膚との接触を避ける		②2~10倍に希釈し、塗布する。	①経口皮アンモニア・ウイキョウ精の調剤原料に用いる。 ②外用虫さされ
清涼化成分	カンフル	カンフル精	局所刺激作用を有し、皮膚に塗布すると発赤又は冷感を生じる					頻度不明(過敏症)								湿漉面へは使用しない 眼又は眼の周囲には使用しない			患部に適量を塗布あるいは塗擦する。	下記疾患における局所刺激、血行の改善、消炎、鎮痛、鎮痒、筋肉痛、挫傷、打撲、捻挫、凍傷(第1度)、凍瘡、皮膚そう痒症
	メントール	日本薬局方「メントール」「ミヤザワ」																		芳香・矯臭・矯味の目的で調剤に用いる